入れて摺り、少しの鹽、味淋酒煮切、鰹節煎等を加へて蒲鉾の肉のやうにし、（かまぼこよりは、煎けを多く入れて柔らかになす）、味噌に合せて汁に仕立つるなり、味噌の立て方普通にてよし、さて椀に盛りて進むる前に、ちさの葉はつみて水にて洗ひたるを細々に切り、汁の中におとし、一と煮え煮て椀に盛りてよし、

春の旅行（續き）

千歳子

知らぬ旅路を辿り行く身は關西線の瀛車の中も何となく不安の念に驅られる樣で乘客多き三等室の片隅に小さくなつて腰掛けてると傍に居た屈髮のハイカラ連も向側に煙草ふかす白髮の爺さんも皆此をかしげな旅娘を不思議さうに見て居るのでした、乘せるものは載せ降りる客は下車せしめつ瀛車は桑名四日市と進み進んで郡岡町を過ぎて後は鈴鹿山脈の山間を縫うて乘客をして坐ろ深山幽谷の美景に醉はしむるのでしたが何時しかと三時も過ぎ四時もゆきやがて奈良市に着くだらうと思はるゝ午後五時過ぎ、四面綠りなす山又山に圍まれたる一小村に瀛車は緩かに其が少みを止むるのでした、「美くしの村里よ、彼處の峰、此處の川邊なるは如何なる人の住家にや」など例の想像に驅られて居ると窓近く呼び立つる車掌の聲は「笠置！笠置！」と云ふのです扨ては名におふ笠置の里かと懷かしやさらば延元帝のゆかしき舊蹟も程遠からじを」と思うた時は、はや手は重きドアーを押し開き足はモープラットホームの上を歩んで開札口に向うて居たのです。瀛笛一聲黃昏の靜けさを破つて我をふいて走り去つた煙のゆくを見送つてステーション前なる唯一條の村道を進んで行きますと一町許りにして大手橋と記された小やかな橋が見えるのです、笠置町とは此よりさきを云ふのか町に沿うて建てられた家々は金殿玉樓の目ばゆきこそ無けれ、茅葺の軒毎には夕飯炊く竈の煙りも脈はしく行き交ふんの面影も何となく穩やかに見なされて心地よく町の背後に空高く聳ゆるは數多の舊蹟に包まれたる貴きみ山と云ふをでした。モー六時もすぎたと見えて暮色蒼然霞は

笠置山麓をめぐつて二羽三羽時にいそぐ夕鴉の聲無くして雲に入るも衰れ深く云ひ知らぬ靜けさ身に迫つて樂しき旅の身の譯もなく心淋しくなるのでした。嗚呼日も暮れた今宵登山は叶ふまじと思ひつくと遽かに宿の撰定に苦しむのです、「都を出づる時「宿は必ず友人の宅に賴めよ決して旅館泊りをするではない」と某師の君の吳々の忠告に旅の初夜は瀧車の中に其後の夜半も友の宅に明かしたのに、一時の感興に心動き前後忘れて下車したものゝ宿るべき所なくては如何にかせん、されば とて目前に史美をつくせる名所見捨てゝ空しく奈良へ赴かんも憾み多し、日は已に暮れたり定むべき宿は無しと進みもやらば退きも得せず大手橋の橋の上に下行く水を眺めつゝ暫し茫然として居たのでした、窮すれば通ずとか兎角するうちふと思ひ附いたのはまた例の突飛な考！而し良策であつたのです、夫れは當村の村長、どんな人かは知らないけれども兎に角名譽ある地位ある村長に事の由を物語て一夜の宿を賴ふといふのでした、是れなれば身の安全は請合と喜ぶ折しも何處ともなく愛らしき子供唄か聞えて來るのです。と見れば十二三歳許りの田舍娘の縺れかゝつた黑髮に新らし手拭鉢卷して脊の赤兒を搖動りつゝ餘念もなく唱ひ續けて來るのでした、此兒を見ると心機一轉更に良策が浮び出して來たのです、其れは此兒の先生、例令此兒が小學校へ通はぬまでも此村に小學校の無い事はあるまい。其校長なる人の宅に賴んだなら同じ敎育に關る好もて承知して吳れぬ事もあるまいとの事でした、で、つと走りよつて、

「ねエちやん此町に小學校があるでせう？」

と云うて見ると、「エ」と答へるのです

「校長樣の御宅は何處？」

と更に聞くと

「雲井先生のおうちかへ？、アンタ學校の先生になりに來たのかへ？、

と田舍言葉も其まゝにあどけなく問ひかけて頻りに此身の樣子を見守るのです其れにはよきに挨拶して雲井氏とやらむの宅をきくと「斯くゝ」と親切に敎へて吳れましたから左に行き右に折れ云ふがまゝに笠置山麓について行きますと、やがて

木津川の川岸へ出たのです、薄暮にも見渡さるゝ清き流れの水豐かに岸の火影のうつるのさへ黄金の延金熔し込んだ様なのに今し一艘の渡船の此方さして漕ぎよせるのが見えるのです、四五名の村人を乘合に向ふ岸へ着いた時はモー一人の小學兒童に道しるべを頼んで居たのです、雲井氏といふは年のとつた人なこと其が主人は久しく病床にあつたが此頃丈夫になつたを、一人娘もモー大きくなつて小學校に奉職中なこと等此兒に途中で聞いて置いて、扨て小松一本生ひ繁げれる門口より唯一人同氏の宅を訪れたのです、質朴なる同氏の宅は今、夕餉を終へか許りか明障子に燈火うつつて樂しげな話聲もきこえるのです、音づれたら如何な人が出て來るだらう、此をかしげな姿を見たら驚きゝ疑ひとに願ひ許さぬ事もや」など案じつ

「御免下さいまし」

思ひ切つて云うて見ると「吉田さんが御出でた樣だ」と云ふ太やかな聲がして五十恰好の男の方が出て來られたのです、終日旅に疲れた身のどんなにか垢づいたらうと思はれるのにズックの鞄の重げに肩を辷て袴の襞積も消えたのを穿き餓じげな顔附をして立つて居る、耻しさ限りはないが今更どうする事も出來ず名刺とり出して事情を話し「一夜の宿を貸して下さい」と哀願すると雲井氏なる其人は初めの疑ひ漸く消えて「そはまた風流なわざよ、よくこそ拙宅を尋ね來られし、とく入りて休息されよと快く諾はれたので嬉しさ抑へがたく泣く子に乳と早速導かれた室に通つて誠籠つた同氏の親切を謝するのでした人を見ば盗賊と思へ」とは誰が教へた言葉でせう一面樣もない此身を何かと痛はらるゝ嬉しさに結ぼれた心も解けて何よりは先づ夕餉をと差し出された膳のものも心おきなく平らげて、問はれるまゝに旅の樣など話して居ると者子と呼ばるゝ同氏の夫人も出て來られて「年はいくつ、學屋は？父母は、と兄弟は？故郷はと物珍らしげに問はれるのも思ひかけなき珍客、こんな頓狂な來客は年頃稀れだと思はれるからだと自分ながらも可笑しくつてならなかつたのです丁度隣家に湯がたつて居るから一風呂浴びてはとすゝめられたのを幸ひ同氏と共に隣家へ行

つたのです雲井氏の夫妻共に面持氣高く物いひ振りも上品に殊に氏の態度の悠然としてせまらぬ樣など何とはなしに由緒ある人らしく自然先生〳〵と云ひあがめられて居たのですが隣家に參つても先生は「東京から親戚の娘がやつて來たがどうでせう杯と全るで小兒を扱ふやうにされるので幼稚園では相當に大人振つてる自分にもなんだかモー小さな小供になつたやうな氣がして云はるゝまゝに浴室に入りますと之れは又都の其れとはすつかり違つて五衛門風呂とか云ふのでした、彌治北太が足駄穿いて入つたといふのも是れだらうに足をやいては大變と用心しながら而し心地よく入浴も終へ持ち合せた白粉も薄くつけて戸外に出るゝ廿日許りの春の日が朧ながら綠深き峰々を照して笠置の里は今一しほ趣を添へ旅の愉快もまたしみ〳〵と身に浸み込むのでした、覓の水に口漱いで雲井氏の宅へ歸ると夫人は茶菓など整へて待つて居られたのです、袖ふり合ふも他生の緣とか斯る處にまよつて來て、思ひかけぬみ心づくしに遇ふことの末長く忘れられじなど云ひ出しますと夫人はつく〳〵此身を見まもられて「造花ならひに京都へ行つてる娘が歸つて居る時ならどんなに喜んだゞらう丁度あなた位の年です東京へも勉强に出たがつたが思ふにまかせず」などいはれながら寫眞など取り出してもてなされるのでした四方山の話のうちに同夫人の若かりし折は藤堂家に仕へて久しく東京本所の邸内にありし事、雲井氏の祖先の富豪なりしことなども聞くにつけて何となく此家の人の奥ゆかしくどんな人の子孫だか聞いて見たくなつて來ると隣家で話し込んで居られた雲井氏が歸つて來られて「モー九時もすぎたから今夜は此御娘を中に昔語りでも聞かして上げやう、奇美の奇團を出してお上げと我兒の樣に痛つて呉れるのです娘さんは奇美子と云はれるのでした、』